第 88 回麻布獣医学会　市民公開講座 2

鯨の生態から捕鯨問題の本質まで

石川　　創

公益財団法人下関海洋学科アカデミー　鯨類研究室　室長（獣医師）

鯨類は哺乳綱鯨目に分類される海の哺乳類である。国際捕鯨委員会（IWC）の分類に従えば現在鯨は 86 種類で、上顎の口蓋に数百枚のヒゲ板を持つヒゲクジラ亜目が 14 種、種や性別によって数や萌出程度は異なるが口腔内に歯を持つハクジラ亜目が 72 種とされる。産まれてから死ぬまで水中で過ごすが、哺乳類であるゆえに魚類とは異なり、肺で呼吸をし、胎生であり、暖海から氷海まで回遊しても体温は変わることなく一定である。鯨は最初から海で進化した生物ではなく、約 6000 万年前に生息していた陸上の四足哺乳類が、再び海に戻って現在の姿に進化したとされる。水棲に適応する進化の過程で、体型はあたかも魚のような形状となった（収斂進化）が、現生の鯨においても四足動物の痕跡が様々な形で残されている。

近年、捕鯨を巡る話題がマスコミを賑わすことが多い。大型鯨類（ヒゲクジラ類とマッコウクジラ等）の商業的な捕鯨については IWC の決定によって停止されたが、古来より鯨を捕り、今なお商業捕鯨の道を模索する日本は、国際捕鯨取締条約で認められた調査捕鯨や沿岸の捕鯨を継続している。しかし欧米を中心とする反捕鯨国は鯨の保護を重視し、捕鯨国とりわけ日本に対して厳しい批判がある。

捕鯨が批判される理由は時により様々に変化しているが、その多くは科学的にも倫理的にも説得力が乏しい。なぜならば再生産が可能な野生資源の持続的利用は反捕鯨国を含め今や世界の常識であり、一部の絶滅危惧種を除けば多くの鯨は他の野生動物と差別化される明確な理由が無いからである。現在の捕鯨反対の思想的な根底には、20 世紀後半からメディアによって形成された「神格化した鯨」があるとの指摘もある。日本の捕鯨が殊更批判される背景には、関係国の国益や、一部 NGO の経済的理由などが考えられるが、捕鯨の是非は、まずは国による文化や食習慣の違いを認めたうえで議論されるべきであろう。

■プロフィール

石川（いしかわ） 創（はじめ） （獣医師）

1960 年生まれ。日本獣医畜産大学（現：日本獣医生命科学大学）獣医学科修士課程を卒業後、水族館獣医師を経て 1990 年から（財）日本鯨類研究所に勤務。南極海及び北西太平洋鯨類捕獲調査で調査団長を務め、南極海では 14 回の航海経験を持つ。2012 年に同職を辞し、同年 7 月より下関市に新しく開設された鯨類研究室の初代室長となる。捕鯨における動物福祉（人道的捕殺）、鯨類のストランディング（座礁・漂着）を専門とする。

著書に「クジラは海の資源か神獣か」（NHK 出版）、共著書に「野生動物救護ハンドブック」（文永堂）、「鯨類資源の持続的利用は可能か」（生物研究社）、「The Wild Mammals of Japan」（SHOUKADOH）、「捕鯨の文化人類学」（成山堂書店）、編著に「日本沿岸のストランディングレコード」（日本鯨類研究所）。